

農業が国を救う!

経済の新しい風

2005 SEPTEMBER

9.20

No.807

定価 600yen

平成17年9月20日発行(隔週火曜日発売)第40巻第18号(通巻807号)昭和45年9月3日第3種郵便物認可

経済界



バジナ
南部 靖之

●特集

農業が国を救う!

株式会社への“農地開放”は衰退産業の農業を活性化させる

●レポート

福島祥郎 オリエンタルランド新社長「ポスト・ディズニーリゾート構想」を語る

USENの買収を断固阻止した日活労組の隠された“思惑”

森田実の大膽予測「選挙終盤戦で流れが変わりつつある」

●インタビュー

神原定征・東レ社長「繊維は基盤事業だが、先端材料でも世界を切り拓く」

Face 2005

夢は開発途上国の経済発展、

独自技術をテコに世界企業を目指す 畠 宏芳・ジーニア&アーレイ社長



常に新しい事業形態を模索しグローバルな視点に立ったその行動力には、氏を取り巻く各界から期待が寄せられている



畠氏は大学時代に、ユネスコのボランティアをしていました。開発途上国の子供たちにワクチンを寄付したとしても、他の病気で死んでいくさまを見て、その国自体が経済発展をし、情報を取れる仕組み(ＩＴ)をつくらなければ、結局は救われないと考え、それに貢献できる企業をつくりたいと思っていた。

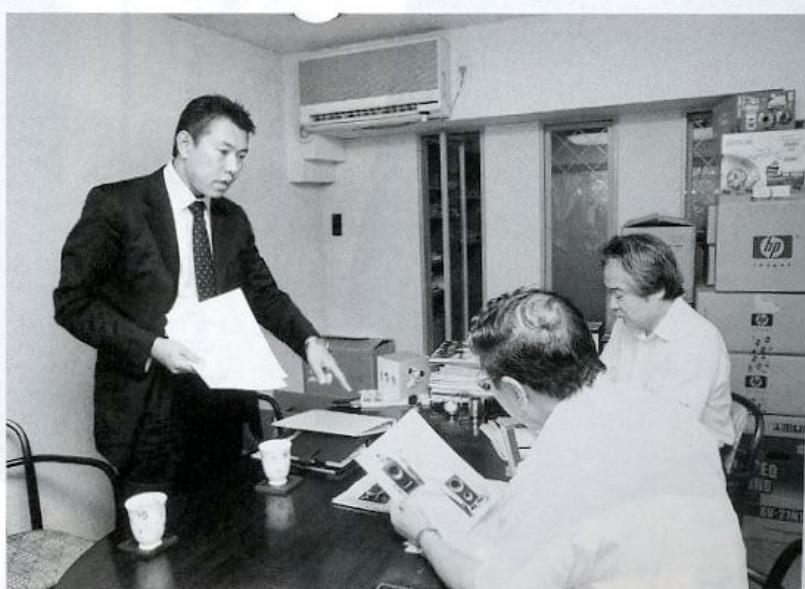
そんな畠氏は臨床検査技師の免許を持ち、大学卒業後は大学病院に勤め、血液の検査・研究を続けた。10年後に病院を辞め、2年ほど勉強をして、バイオメディカル関連ＩＴ、技術開発の会社・ジニア＆アーレイを立ち上げる。夢の第一歩だ。そんな中、応用電子研究所の神田社長に出会つたことが、彼の運命を変えることになる。理念が合い、応用電子の代表取締役も兼務することになったのだ。

応用電子は、大企業からの受託開発を主な収入源にしていた技術屋集団。しかし、受託開発



先輩経営者、有識者の方々と月に一度の定例懇談会では、毎回活発な意見交換が行われる

日本伝統文化の「道」を語るために始めた華道は、池坊家元教授の資格を持つ。



取引会社(株)バズスタイルの役員と商品企画についての打ち合わせに赴いた

Face 2005

畠 宏芳(はた・ひろよし)

ジーニア&アーレイ社長

1963年長野県生まれ。86年藤田保健衛生大学卒業。日本医科大学付属病院勤務。この間、学習塾経営、東京医薬専門学校講師兼務。96年同病院退職。99年ジーニア&アーレイ設立、社長就任。2000年応用電子研究所社長。02年第2回日中政経フォーラム日本側訪中団として参加。(財)ユースワーカー協会評議員。池坊華道家元教授。

だとせつかく開発した技術もパテントも、すべて大企業に取られてしまう。そこで、工場を持たないファブレスメーカーとして、音の出る極薄のセラミックや生体感知センサーなど、大企業にはまねのできない独自技術を開発するようになつた。その技術を持って開発途上国の工場に委託すれば、経済発展に寄与することもできて一石二鳥というわけだ。ITやコンテンツベンチャー花盛りの中でも、メーカーとして生き抜こうと必死だ。

しかし、いい技術があつても、弱小企業では商売もそう簡単にはいかない。そこで、今年度から応用電子の一部門を、技術系ではない大企業の傘下に入れ、アライアンスを組み、技術の大部分をジーニア&アーレイが引き継ぐことになつた。世界的な企業になるという畠氏の夢を乗せて。





「ほぼ毎日仕事で外を飛び回っているので、社内で過ごす時間は貴重なんです」



良き氏の理解者であるセンチュリー証券野澤社長を訪問。「出身が同じ長野県と
いうこともあってとても親しくさせていただいています」



事業パートナーの(株)トリプレクス本間社長を訪問、新事業の打ち合わせが行われた



本社にいる時はできる限り現場の技術者とコミュニケーションをはかる



日中国交30周年第2回日中政経フォーラム(人民大会堂)ではスピーカーの一人として選ばれた



氏が常務取締役を務める(株)アトムの村井社長と打ち合わせ



氏が役員を務める財団法人ユースワーカー協会の堀添理事長と打ち合わせを行った



毎日かなりタイトなスケジュールの中、この日はフランスでの事業会議に飛び立った

(撮影／山口 朗)